



国際ロータリー第2790地区 千葉南ロータリークラブ会報

THE ROTARY CLUB OF CHIBA SOUTH



■創立■ 1964年3月2日 ■例会日■ 毎・金曜日12時30分 ■例会場■ オークラ千葉ホテル
 ■会長■ 小林 透 ■幹事■ 廻 辰一郎 ■会報委員長■ 石井 慎一
 ■事務局■ 〒260-0027 千葉市中央区新田町12-1 トーシン千葉ビル7階 (☎043-245-3204)

2016-17年度

第2587回

平成29年5月26日(金)点鐘12:30 <雨>

- ◆ロータリーソング『それでこそロータリー』
- ◆四つのテスト ～言行はこれに照らしてから～
 1. 真実か どうか
 2. みんなに公平か
 3. 好意と友情を深めるか
 4. みんなのためになるか どうか

◆お客様紹介

◇本日はいらっしゃいませんでした。

◆会長挨拶及び報告 小林 透会長

吉田会員、ご入会おめでとうございます。今後ともよろしく願い致します。

さて、先週、私の友人がロータリーの予備知識なしで見学に来てくれました。当クラブのホームページを見て、どうやら奉仕団体であり、地域のリーダが入っている会である。自分がしっかり成功したら、そのお金を社会に貢献したい。ところが、そのお金をどこへ寄付したらいいのか分からない。ロータリークラブは、まさにその受け皿になってくれる場であると思う。と、話してくれました。

◆入会式

吉田 与一郎 会員

(紹介者⇒ 塩谷邦昭会員、伊藤和夫会員)



皆様、こんにちは。
 晴れて千葉南ロータリークラブの会員の一員となれましたことを感謝申し上げます。ロータリークラブの活動については、今後きちんと勉強していくつもりです。ご指導ご鞭撻をよろしくお願い致します。今後会員の一員として奉仕活動を頑張っていくつもりです。よろしく願い致します。

◆委員会報告

◀米山記念奨学会より感謝状伝達>
 「第1回米山功労者」
 小林 透会員

鈴木美津江米山委員長より

皆様のお陰をもちまして、米山功労者の今年度の目標である8名を達成しました。本当にご協力ありがとうございました。シェルパ・チリンさんは、今、大学院に通っています。ロータリーの援助は無くなりましたが、アルバイトをして勉強に励んでいるようです。

有難うございました。



◀ロータリー財団より記念品伝達>



「第4回 マルチプル
 ポール・ハリスフェロー」

斎藤 昌雄会員

◆幹事報告 廻 辰一郎幹事

◇訃報

千葉港RC・浅沼康男元会員、市原中央RC・松田紀明会員のご冥福をお祈り致します。
 (クラブより、弔電をお送りしました。)

◆ニコニコボックス報告

◀卓話者(5/19) 中根 昭様より頂戴しました。>

◀小林 透会長・廻 辰一郎幹事>

朝から雨・・・ 梅雨入りを間近に控え、何となく気が重くなりそうな季節がやってまいりました。皆様、ご体調

にはくれぐれもご留意下さい。

さて、本日は、吉田与一郎さんをご入会されます。ぜひとも千葉南クラブに沢山の力を注いでいただけますよう、今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

《伊藤 和夫会員》

吉田与一郎さん、千葉南ロータリークラブご入会おめでとうございます。千葉信用金庫寒川支店・猪野支店長の後任として、ご入会お待ちしております。仕事の関係で吉田さんのお父さんとは、30年来のお付き合いです。ロータリーライフを是非楽しんでいただき、身長と同じく大きく成長してください。

《石橋 チヅエ会員》

千葉そごう6階にて5/30～31日、6/1～5日の7日間、千葉グルメ博覧会に出展しています。太巻き祭り寿司、蕎麦打ちなどの実演をしながら試食できます。

是非、お立ち寄りください。

雄氏です。主に、千葉氏の研究や郷土の歴史の探求をしている会です。私もご縁があり、副会長して活動させて頂いております。ご興味がある方は、是非、入会して下さい。

千葉氏は、桓武天皇の血を引く桓武平氏の一族です。現在の緑区大椎(おおじ)町に本拠をおき活躍した大椎常兼(おおじつねかね)の息子、常重は平安時代後期の大治(だいじ)元年(1126年)6月1日に現在の中央区亥鼻付近に本拠を移し、千葉を名乗りました。これが、千葉の都市としての始まりだと言われていました。

常重の子、常胤は千葉氏の中興の祖とされる人物です。1180年、石橋山の戦いに敗れた源頼朝が海を渡って房総に逃れてきた際に、常胤はいち早く頼朝の味方に付くことを決めました。その後、常胤は一貫して頼朝を支え、鎌倉を本拠とするよう進言するなど筆頭御家人として活躍しました。頼朝も常胤を父のように慕っていたと言われています。常胤は鎌倉幕府の成立に大きく貢献した名将だったのです。

★☆☆ 全国に広がる千葉氏 ～六党(りくどう)～

常胤は息子たちとともに源平合戦や奥州合戦に参加し、その功績によって、北は東北から南は九州まで、全国に所領を獲得しました。

千葉六党と呼ばれる常胤の6人の息子たちは、所領を分割して引き継ぎ、それぞれが本拠とした所領の地名を名乗りました。千葉氏はその後、分家を繰り返しながら、全国各地に広がっていったのです。



本日のニコニコボックス	16,000円	累計	343,000円
金の箱	680円	累計	16,120円

◆出席報告(会員数50名)

出席者数	欠席者数	ピンター	5/12 修正出席率
33名	17名	0名	73.47%

千葉市内例会変更のご案内 [メーキャップにご利用下さい。](#)

千葉RC	月	—	三井ガーデンホテル千葉
千葉西RC	火	6/20・6/27	センシティタワー「東天紅」
千葉幕張RC	火	6/27	アパホテル&リゾート東京ベイ
新千葉RC	水	6/21・6/28	京成ホテルミラマーレ
千葉北RC	水	6/28	ホテルポートプラザちば
千葉中央RC	木	6/29	三井ガーデンホテル千葉
千葉港RC	木	6/22・6/29	京成ホテルミラマーレ

☆☆☆☆ 本日の卓話 ☆☆☆☆ ☆

演題⇒「千葉氏(東氏)と鷺見氏の関係」
卓話者⇒ 鷺見 隆仁会員



「千葉氏を語る会」とは、元千葉市郷土博物館館長であり、千葉氏研究の第一人者で歴史博士の丸井啓司氏が中心の会です。丸井啓司氏も副会長として活動しており、会の会長は、当クラブ会員の向後保

★☆☆ 東氏

東氏(とうし)は、日本の氏族で千葉氏の庶族の桓武平氏。古今伝授の家として有名。鎌倉時代の初めに千葉常胤の六男胤頼(たねより)が下総国東荘(とうのしょう、現在の千葉県東庄町)に住み、東大社の神官(本来の東氏)より名前を譲り受け、東六郎大夫(とうのろくろうだゆう)と称したのに始まる。子の重胤、孫の胤行(たねゆき)歌道に優れ、ともに鎌倉幕府3代将軍源実朝(さねとも)に重んじられた。胤行は、承久の乱の戦功により美濃国山田荘(現在の岐阜県郡上市)の地頭となり、篠脇城を居城とした。子の行氏がこの地に土着し、以後、子孫は在京人として六波羅探題のもとで活躍した。

室町時代には室町幕府奉公衆となる。室町時代中期の当主東常縁(とうつねより)は古今伝授を受けた歌人として有名である。応仁の乱が勃発すると、東氏は山名氏の西軍に味方し、細川氏の東軍に味方した美濃守護の土岐氏と対立する。

戦国時代に入ると衰退し、永禄2年(1559年)、東常慶(とうつねよし)は一族の遠藤氏と対立し、娘婿の遠藤盛数に攻められ滅亡した。以後は遠藤氏が東氏の家督も

継承した。一方で家督を奪われた常慶の子の常堯(つねあき)は飛騨の内ヶ島氏理(うちがしまうじまさ)の庇護を受けたものの、天正大地震で内ヶ島氏と運命を共にした。

盛数の子で常慶の外孫である遠藤慶隆(えんどうよし)は戦国時代、安土桃山時代を乗り切り、江戸時代には美濃郡上藩主となり、その後子孫は近江三上藩(滋賀県野洲市)へ移封されて存続した。最後の藩主である遠藤胤城(えんどうたねき)は明治維新後に縁のある東氏に改姓し、子爵を授けられている。

★☆☆ 東常慶(とうつねよし)

東氏の支流遠藤氏の胤重(たねしげ)の子、和田五郎左衛門が小多良郷和田会津(現郡上市)の要害に抛り、宗家にも抵抗するようになると、その勢力拡大を恐れた常慶は、天文9年(1540年)に木腰城主の遠藤胤縁(たねより)(胤重の父)、その弟盛数と謀り、五郎左衛門を篠脇城修理の相談と偽っておびき寄せ、胤縁(たねより)・盛数の手により暗殺した。これを知った和田氏一族郎党の報復の軍議がまとまらないうちに、常慶は和田一族を急襲して滅ぼし、小多良の地を一族の遠藤善兵衛に与えた。

天文9年(1540年)8月25日、越前の朝倉義景の兵が領内に侵入し、石徹白村(いとしろひびとむら)(現郡上市白鳥町)の常慶の娘婿、石徹白源三郎(いとしろびとげんざぶろう)に先導を強要したが、源三郎はやむをえず朝倉勢を案内しながらも、弟の兵庫に常慶へ急報させた。常慶は遠藤胤縁(たねより)・盛数兄弟の進言で決戦を覚悟し、篠脇城の防御を固めた。9月3日に攻撃してきた朝倉軍を、放射状堅堀(たてぼり)から巨石を落下させ、撃退したが、それによって城自体も著しく破損するという結果になった。翌年、城の修復がままならない状況下で、再び朝倉勢が郡上に迫ると、常慶は大島(現郡上市白鳥町)の安養寺に救援を依頼。安養寺は信徒1,000人を集めて、美濃・越前国境の油坂峠に布陣し、安養寺の軍のみで朝倉勢の侵攻を阻止した。天文10年(1541年)、篠脇城の修復を諦めた常慶は改めて郡上の防衛に適した城を築く事を決め、赤谷山(あかだにやま)に東殿山城(とうどやまじょう)を築き、子の常堯(つねあき)に守備させた。

天文10年(1541年)、阿千葉城(現郡上市大和町)主鷲見貞保が命に背いたため、常慶は討伐軍を起こし、貞保を自害させて、古代から郡上北部で勢力を誇っていた鷲見氏の所領を奪った。

天文21年(1552年)、東氏一族で福野城(現郡上市美並町)にあって下川筋で勢力を拡大していた河合七郎一族を不安視した常慶は、遠藤盛数に討伐を命じ、盛数は七郎を滅ぼして下川筋の領地を与えられ、鶴雄山城を築いた。

常慶(つねよし)は実子の常堯(つねあき)が悪逆非道だったため、遠藤盛数を婿養子に迎え、弘治年間(1555年 - 1558年)に家督を譲ったともいう。一方、常堯(つねあき)にも遠藤胤縁(たねより)の娘と縁組させ

ようとしたが、胤縁は常堯(つねあき)の非道を理由に同意せず、娘を畑佐六郎右衛門に縁付かせた。これを恨んだ常堯は、永禄2年(1559年)8月1日、胤縁が東殿山城(とうどやまじょう)を訪問すると、家臣長瀬内膳に命じて鉄砲で射殺させた。かねてから宗家にとって代わることを考えていた盛数は、兄の弔い合戦を大義名分に郡内の諸豪を募り、8月14日に出陣した。一説には飛騨の三木頼綱の加勢も得た盛数は八幡山山頂に布陣し、常慶・常堯と吉田川を挟んで南北に対峙した。連日の防戦の末、8月24日に東殿山は落城し、常慶は戦死した。

★☆☆ 鷲見氏 藤原北家。家紋は「丸に剣菱」

美濃国鷲見郷領主。藤原不比等→藤原鎌足→藤原北家の祖藤原房前(ふじわらふささき)不比等の弟の家系より出た藤原頼保を祖とする。伝承によると、美濃の山間に人々に危害を及ぼす大鷲が棲息することが順徳天皇の耳に達し、頼保は命により郡上郡雲ヶ嶽(現鷲ヶ嶽)で大鷲2羽を退治して、朝廷から鷲見姓を許され、美濃国芥見荘鷲見郷を永代下賜されたという。頼保は同地向鷲見城(むかいすみじょう)を築き、元久元年(1204年)に死去した。

頼保の孫の家保は、鎌倉幕府の御家人として相伝の所領を安堵され、承久3年(1221年)の承久の乱では幕府方に従軍して、地頭職を安堵された。家保の子の保吉(やすよし)と諸保(もろやす)は、弘安8年(1285年)に大番役に任じられている。なお、同じく承久の乱で功を挙げた下総国の東胤行(たねゆき)が、近隣の郡上郡山田庄の地頭となっている。

元弘3年(1333年)の鎌倉幕府倒幕戦には、保吉の孫忠保が足利尊氏に従軍し、近江国馬場前山で戦った。南北朝時代には、鷲見氏は美濃守護土岐氏と共に足利方で南朝と戦った。忠保は南朝方のシヨウ王討伐に功を挙げている。南北朝時代が鷲見氏の最も活躍した時期で、当時の鷲見氏の所領は、鷲見郷八ヶ村に東前谷、越前穴馬の一部、牛道郷の一部に及び、その威勢は近隣に響いていた。忠保の子干保(ほしやす)(禅峰)(ぜんぼう)は、土岐康行の乱で康行討伐に功を挙げ、管領斯波義将(しばよしゆき)より郡上郡鷲見郷・河西・河東の地頭職をそれまでと同様に安堵された。武勇に優れた干保は、歴代当主のなかでも特に傑出した武将であり、鷲見氏の全盛時代であった。

干保の孫行保の次男美作守(みまさかのかみ)保重(直重)は、美濃守護土岐成頼の武将として転戦し、山県郡北野その他五郡二村落に亘る領地を得、鷲見氏のそれを尾州の一部をも含む18万石にまで拡大させた。文明10年(1478年)、保重は鷲見城を弟の大学助保兼にゆずり、新たに北野城を築き自ら城主となった。保重は永正7年(1510年)に美濃守護代斎藤利良(さいとうとしなが)と不和になって攻められ、自刃した(享年53)。美濃守護土岐政房が、保重の子保定を再度北野城主にしたが、永正14年(1517年)に斎藤利良が土岐政頼を立てて土岐政房・頼芸と争い、保定は政房方で戦って討死した。翌年8月に土岐政房が勝利し、保重の次男

直保(直康)が北野城主となった。

一方、鷺見城主としての鷺見氏の勢力は次第に衰えた。東氏と争って破れ、ついにはその旗下となって、居城も阿千葉城に移った。天文10年(1541年)、東常慶が阿千葉城の鷺見貞保を攻め、激戦の末に貞保は自刃。鷺見郷領主としての鷺見氏の歴史はここで終わる。

ただし北野城主の鷺見直保は土岐政房・頼芸に仕え、天文16年(1547年)に斎藤道三が大桑城の頼芸を攻めると、奮戦の末討死した。代わって直保の従兄弟忠直が鷺見家を嗣ぎ、北野城主となり道三に仕えた。道三と嫡男義龍が争った際は道三を一時北野城に迎え入れるなどしたが、弘治2年(1556年)の長良川の戦いで道三は討死し、忠直もこのときに戦死した。直保の弟保光は、この戦いに義龍側で参加し、義龍の死後龍興に仕えた。

鷺見城主・貞保の遺児千代丸は老臣餌取広綱(えとりひろつな)に背負われ武儀郡西牧谷に逃げ落ち、成人して兵助と改め、永禄2年(1559年)ごろ織田信長に家の再興を願い出たのが聞き入れられ、信長の要請を受けた八幡城主遠藤盛数に大嶋村を与えられて正保と名乗り、大嶋鷺見氏の祖となった。

永禄10年(1567年)に信長が稲葉山城を攻めて龍興が敗走すると、保光は子の定重と共に郡上に帰り、元鷺見城主の叔父・保兼(やすかね)の養子となり、遠藤慶隆(よししたか)(盛数の子)らに仕えた。この時期に鷺見氏は遠藤氏の家臣として八幡城下に屋敷を構え、鷺見城は鷺見家家臣の松下五左衛門が在城している。

一門の保義(忠左衛門)は、慶長5年(1600年)、関ヶ原の戦いの前哨戦の一つである八幡城の合戦にて討死した。

保重の玄孫正保は小早川秀秋に仕え、備前岡山にて350石を領したが、秀秋没後病を得て高富に帰り承応元年(1652年)に没した。正保の子孫は代わって備前に入った池田氏に仕え、池田氏が山陰へ移封されると、米子城(よなごじょう)にて鳥取藩に仕えた。

☆☆ 三上藩

三上藩(みかみはん)は、現在の滋賀県野洲(やす)市野洲町三上に存在した藩。藩庁は三上陣屋(城主格)。藩主家は遠藤氏(東氏の遠戚)である。遠藤家は美濃郡上藩2万4000石を領していたが、元禄2年(1689年)に第4代藩主遠藤常春が謎の死を遂げると、これが家臣団を二分する家督騒動に発展。跡目を相続した遠藤常久も元禄6年(1693年)7歳の時に家臣によって毒殺されるに及び、ここに郡上藩遠藤家は無嗣改易となった。

しかし藩祖・遠藤慶隆の功績が特に考慮された結果、時の将軍・徳川綱吉は側室・お伝の方の妹と旗本・白須正休(しらすしょうきゅう)の間にできた長男を、いったん遠藤家の遠縁にあたる美濃大垣新田藩1万石の藩主・戸田氏成の養子としたうえで、これを改めて遠藤家に入れて遠藤胤親(たねちか)と名乗らせ、この胤親に常陸・下野(ひたち・しもつけ)で都合1万石を与えた。こうして旧郡上藩遠藤家とはまったく無縁ながらも胤親が大名に取り立てられたことで、遠藤家は形ながらも家名存続を

果たした。この胤親が元禄11年(1698年)に近江四郡に移封となり、ここに三上藩が立藩した。最後の藩主である遠藤胤城(えんどうたねき)は明治維新後に縁のある東氏に改姓し、子爵を授けられ華族に列している。

☆☆ 三上藩 家老職としての鷺見氏

藩士「鷺見(スミ)家の歴史」

藩主の遠藤家はもと美濃の郡上を領していた一族である。一時は無嗣改易の危機にも陥ったが、徳川家の裁量により養子を得て、17世紀末期に三上藩の藩主となった。鷺見家ももとは美濃の郡上八幡・鷺見郷に住んでいた武士の一族である。遠藤家の家臣として三上にまで移りすみ、三上及び江戸藩邸にて家老として江戸時代末期明治維新まで仕えていました。

☆☆ 千葉氏と鷺見氏の関係まとめ

千葉常胤の六男東胤頼の一族とは、時代がへて遠戚になるが、その子孫東常慶に鷺見郷領主としての座を奪われる。その後、東氏の支流遠藤氏に仕え、家老職として明治時代まで至る。遠藤家は、廃藩置県で藩がなくなるも、明治政府から華族として列せられた。

☆☆ 千葉市 轟町 大日寺

大日寺境内には、千葉常兼から胤将に至る千葉氏16代の墓碑である五輪塔を安置しております。五輪塔の奥にある多層塔には、「文安二年」(文安期:1444~1448)の彫銘が見受けられますが、五輪塔の銘文は墓石の劣化が進み、判読は不可能な状況にあります。しかし、鎌倉時代から室町時代のものだという確認はなされており、昭和35年に千葉市の重要文化財として「史跡千葉家十六代廟所」の指定を受けました。



第2588回例会

日時⇒ 平成29年6月2日(金) 点鐘12:30

卓話⇒ 『自己紹介』

オークラ千葉ホテル

総支配人 竹中 正二様

第2589回例会

日時⇒ 平成29年6月9日(金) 点鐘12:30

卓話⇒ 『アサヒスーパードライの歴史』

アサヒビール(株)千葉統括支社

支社長 中村 昭彦様